

令和3年度 第2回島田市認知症対策検討委員会

開催日時 令和4年3月2日(水) 19:00~20:20

開催場所 島田市保健福祉センター 研修室(3階) ハイブリット会議

出席者 【委員】

島田市医師会	小埜 聡司(会長)
島田市医師会	田口 博之(副会長)
榛原医師会	高木 勇人
島田薬剤師会	清水 雅之
榛原薬剤師会	進士 寿子
地域包括支援センター(第一)	栗田 真理
地域包括支援センター(第二)	鈴木 伊津子
地域包括支援センター(六合)	鈴木 桂子
地域包括支援センター(初倉)	勝浦 麻美
地域包括支援センター(金谷)	塚本 里枝
地域包括支援センター(川根)	長谷川 諒
グループホーム(汽笛)	森下 隆利
デイサービス(合歓の家)	富岡 昌子
ケアマネジャー(ケアマネットしまだ)	相村 里子
認知症家族の集い(会員)	益田 佳江
認知症家族の集い(会員)	戸田 奈津子
民生委員	増田 隆男

17人

【事務局】

包括ケア推進課長	大塚 昌利
地域支援係長	米澤 美晴
主事	曾根 翼
主任保健師	持塚 安代

傍聴者 2名

1 開会

2 包括ケア推進課長あいさつ

今日は、お忙しい中、お仕事後のお疲れの中、認知症対策検討委員会へご出席いただきありがとうございます。コロナ禍で認知症施策、介護予防が計画通り進んでいない状況です。島田市では年明けから3回目のワクチン接種をしています。2月27日現在、市民全体では19935人、全人口の25%が3回目の予防接種を終えています。65歳以上の16045人、全高齢者の54%がワクチン接種を終えています。予防接種が進めば介護予防事業や認知症対策の事業が行えると考えています。

独居の高齢者の皆さんですとか、家族関係が希薄なご家庭ですとか、同居の家族がいても高齢者の心身の変化に気づけなくて病院への受診や介護のサービス利用に至らないケースが多くあると見受けられています。

今日の会議では、認知症やその予防や市民の皆様への周知の方法、認知症の方やその家族の方が安心

して暮らせるような支援体制の整備を進めていくために、開催させていただいています。

本日は、さまざまな立場の皆様が委員として出席をしていただいておりますので、それぞれの立場からご意見をいただきたいと思っております。

3 会長あいさつ

ご多忙な中、認知症対策検討委員会へご参加いただきありがとうございます。オミクロン株が猛威を振るっています。これまでのデルタ株の時と同様に、対応をしていく必要があります。

認知症の方、認知的フレイルにあたるわけで、免疫力が落ちており予防接種を勧めていく必要があります。先日、テレビ番組で婦人科の医師が言われていました。看護や介護をしている方は One of them ではなく only one であります。

毎日のように診察をとおして相談を受けています。認知症診療を始めて 10 年になります。その中で、慣れがでてきているなど自分自身が感じることもあります。自分の中で見直して一例一例、持っている背景が違うのでケースバイケースで相談にのってあげることが大切。基本であると感じました。

4 報告・検討事項

- (1) 島田市の認知症施策について・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料 1
事務局説明
- (2) 地域包括支援センターの認知症施策に関する取組・・・・・・・・・・資料 2
各包括から説明

意見

委員) 市や包括支援センターの活動を聞いて、地域での見守りや認知症への理解が広まっているように思う。家での日常の介護の場面では、認知症になる前の家族の関係が良好でなく、複雑な方も多く、適切に介護ができない場合が多いと聞く。家族の集いなどに積極的に参加できると良い。VR 体験会にも自分も参加をし、認知症の方の行動に納得できることが多かったので、紹介していきたい。

委員) コロナ感染への余談が許さないと考えている。デイサービスでは基本的な手洗い、マスクの装着、器具の消毒を常に行っている。トイレや浴室の清掃、消毒は使用事に行っている。利用者家族に濃厚接触者がでたお宅があった。保健所の指示に従って、自宅待機をしてもらい 4 日間デイサービスをお休みしてもらった。その間に認知症の進行予防のために脳トレのプリントをお宅へ届け、1 日 1 回は電話をかけて様子を伺った。

職員の家族で濃厚接触者がでた。職員には PCR 検査を受けてもらい、陰性であったが 3 日間、休みを取ってもらった。今後もコロナに感染しないように、日常生活に気をつけて過ごしていきたい。

委員) 母親が特養に入所して 2 年になる。入所当時は毎週会いに行っていた。コロナ禍で面会ができなくなった。母親が寂しがっているのではないかと言う気持ちがあった。去年の秋から窓越しの面会が可能となり、2 週間おきに顔を見に行っている。家にいた時より母親の表情が豊かである。ここにいる人たちは、良い人たちで若いお兄ちゃんも良くしてくれて楽しいよと、にっこり笑顔になると私もほっとする。ただ 2 分もすると忘れていく。かわいいと育ててくれた孫の話をする、誰のことか忘れていて認知機能の低下が進行していると感じる。

昨年の夏、認定調査を受けた。介護度が 3 から 2 になると、施設長から退去しなくてはならないと言われる不安があった。母を在宅で受け入れるとなると長時間、マスクの装着が難し

い。コロナに感染してしまう不安もある。本人は歩けると意気込みがあるので、自分の見ていない間に転倒をする可能性もある。施設では車椅子を使用して移動をしている。自宅の限られた空間となるため、車椅子の方向転換が無理ではないかと思っている。私も仕事を続けられなくイライラした気持ちを母にぶつけてしまう可能性もあり、夫や嫁いだ子供たちに心配をさせてしまうことになるかと思う。

家族の集いに参加している。皆さんの体験を聞くと自分はまだまだ恵まれているなあと感じる。ある夫婦の話です。夫が四つ這いで室内を歩き回る。要介護1とのことですが、島田市の要介護認定の判定は他の市に比べて厳しすぎるという話を聞くこともある。母も認定調査員が来るといつもできないことができる。そのような姿をみると家族は困惑する。

その時の様子、受け答えだけで介護度を決められるのかとも思う。私自身、認知症は介護度が進んでいく病気だと思う。介護度が3から2もしくは、2から1になるのか、よくわかりません。

会長) 島田市は介護認定審査が厳しいと耳にすることがある。認定の調査とそれを補填するために主治医の意見書がある。調査員が来るとよくできる、それを補填するのが主治医の意見書である。長寿介護課とも話をし、みんなで検討していきたい。

委員) 今年95歳になる介護度4の母と今年90歳になる介護度2の父親がいる。本人たちは元気。

母はデイサービスに週3回、デイサービスに行かない日に訪問介護サービスで昼食介助とトイレ介助に週3回来てもらい、元気に過ごしている。

父親が昨年夏に玄関で転倒、右肩を複雑骨折して片手が動かなくなった。介護の認定調査があり、介護度1から2にあがった。今までは、2人を車に乗せて外出できる時には買い物に行っていたが、コロナの影響で感染が怖くてスーパーにも一緒に連れて行くことができている。母親はデイサービスへ行っているが、父は外に行くことがない。病院へ月に1、2回行く程度の外出。主治医が近所にいるが、何か月かおきに受診するだけで私が薬をもらいに行く。人と接する機会がない。骨折してから余計に家にこもることが多くて、認知機能が怪しくなっている。認定調査の人がくると、確実に受け答えをすることができた。ベッドからの起き上がりもいつも時間がかかるのに、スムーズに起き上がることができ、そう言うものかと思った。

2人を看ている私も以前は日中、友達と会うことができていたがコロナ禍で息抜きに外出することをためらってしまう。外出したことでコロナに感染してしまったらと、躊躇している。必要な買い物にしか外出できていない。精神的にイラつくことがあり、気をつけないといけないなと思っている。

会長) コロナに関しては、本人に対しても家族に対しても悪影響かなと思う。

委員) コロナの影響で外に出ない、人との関わりが少なくなることが認知面の低下に影響を及ぼす。人は人と触れあわないことが問題だと痛感している。悩みを内に抱え込んでしまう家族のはけ口として、相談に見られた家族には、愚痴でも何でも良いので吐き出したい時には、包括支援センターへ話をしに来てくださいと伝えている。

認定調査については、何歳になっても人間は見えがあり自分はできるというものがある。普段行えない方でも認定調査においては、できる方もいる。よって常に行える方と状態像をとられてしまうと困る。更新申請において、家族に普段の様子を調査員に伝えて下さいと話をしている。認知症であると体は動けていても、行動は不一致であり目を離せないことを調査

員に伝えてもらいたい。調査を受ける時には、言わなくても家族が感じている苦勞がわかってもらえるだろうと家族は思いがちであるが、やはり伝えないとわからないことを伝えている。言葉に出して伝えていく必要がある。

委員) 認知症の症状が見られ始めた家族等から、相談をいただくことが多い。認知症ケアガイド等を利用して、症状の経過を見通して説明をしている。ガイドに載っている対応をした方が良いのはわかっているが、同じようにはできないと言われる。認知症の人に対する好ましい対応を伝えるのではなく、家族が感じている思いは、自然なことであることを受け止める。認知症の方本人も自分に起こっている変化に戸惑いを感じている。認知症の方本人がわかる場合には、その方の良いところを言語化して家族へお伝えしている。家族がその方の見方を変えていただけるように、心がけている。

委員) 行方不明者の連絡が入る。GPSで位置情報を把握するためには、スマートフォンの位置情報がONになっていることが前提にある。以前私の知り合いの家族が本人にガラケーを持たせたが、持参しないため役に立たなかったと言う話をしていて。費用が安く利用できないものが無いかと思う。簡単に付けるものがあれば普及すると思う。本人の意思で身に着ける方法は難しい。

近所に住んでいる軽度の認知症の方で、ケアマネジャーがいてサービスを受けている。ケアマネジャーの訪問時に換金屋が家にあがっていたため、自分のところに連絡が入ることがあった。その時はそのお宅から物が、持っていかれることはなかった。その方は独居生活で親族が遠方にいるため、親の状況がわからない。連絡を入れたら、次に帰省した時に親と相談すると言われた。緊急通報システムの情報提供をしたが回答はなかった。今後も詐欺にひっかかってしまうのではないかという心配がある。

会長) 徘徊の患者がいた。時代が進まないと検索方法の解決は難しい。スマートフォンを保持していれば、検索はできるが携帯していないとできない。今後、めがね等に位置情報を仕込むなど技術のテクノロジーが進化すれば変わりそう。

委員) 行方不明者がいるが、家族もあまり心配していない。元々の家族関係、今までの生き方が影響している。この方は認知症ではないので、GPSが確立しても見つかるわけではない。全国でも行方不明の高齢者は増えている。毎週のように検索依頼の通知が包括支援センターにも送られてくる。徘徊高齢者が行方不明で見つからない事態は回避したい。

包括支援センターで介護申請の相談を受けた時には、調査時、本人のプライドを傷つけないように、本人の前で状況を伝えないように話をしている。後で読んでもらえるように、調査員へ様子を記入した紙を渡すように伝えている。そうすることで状態が、介護度に反映されているように感じる。

今年度、介護離職の防止と早めの相談につなげられるように、40、50代を対象とした認知症に限らず介護全般の講座、介護保険の利用の仕方などの講座をオンラインで開催した。若年性認知症の患者の支援を国が勧めているが、相談がない。過去に相談を受けた方で介護度がついている方は進行が早く、入院して積極的な投薬を受けている状況がある。なるべく早めに相談に来てもらいたい。

会長) 若年性の認知症の患者は通院している。進行は早い。ダウン症の人でも進行が早い。

委員)大きく開催はできていない。アフターコロナに立ち上げしやすくしておくためにも、細々と開催をしている。包括支援センターの力を借りながら開催している。参加者、リピーターも増えている。成果はできていると感じる。

委員)認知症カフェについては、コロナ禍のため積極的に周知ができない。近くの地域の方や1回来た方が中心となっている。包括支援センターも参加して地域の困りごと、参加者の認知面、生活全般の困り事を聞かせてもらっている。包括支援センターでも地域の課題として、周知をしていこうと思っている。

委員)薬剤師会の会員の中では、第6波は認知症だけではなく、色々なところで受診控えをしていると言われている。認知症ではなく、その他の疾患の症状が悪化している。認知症の方は家族が受診をサポートしているため、受診が難しい事例がでていっていると言われている。認知症ではなかったがコロナ禍で受診をためらい、症状が進行してからの受診となっている方もいる。手をつくせず、施設入所してしまう方もいた。

薬剤師会としては、服薬後のフォローとして処方箋でお薬を渡した後に、定期的に連絡をいれている。薬剤師の在宅への訪問も増やしている。

認知症カフェの開催は、コロナ禍では難しい。注意が必要な方を対象として開催した。民生委員や包括支援センターと協力して行い、講話を行った。

薬局にかかっていない方であるが受診についての助言をさせてもらった。今まで見えていなかったところへ、顔を出すことも大切であると感じた。

会長)第二包括が開催した、オンラインでの認知症カフェは新たな試みで、今後期待されることである。

委員)認知症の方も薬局に来られる。家族も一緒に来られていたが、コロナ禍で家族しか来られない。理由を聞いたら、マスクをつけたがらないので、外に出せなくなったと言われた。

外部との接触が大切なのに、外部との刺激を遮断している。

認知症の方の日常生活の様子を家族が受け止めて、医師やケアマネジャーにアピールすることが大切。認定調査の時に家族の方に、意見を言ってもらいたい。本人が頑張っていることは、褒めてもらいたい。

家族と本人との関係性が大切。認知症になったから、仕方がないとあきらめない。普通の生活に近づける。ほめること、刺激も大切。コロナ禍ではあるが、外出できるように家族にはフォローしてもらいたい。独居の方の生活が心配ではある。

委員)認定審査を受ける、家族に対して伝えている。普段の様子を本人の前ではないところで伝えて下さい。紙に書く方法でも良いと伝えている。

あまり良い言い方ではないかもしれないが、本人にどれくらい手をかけているのか、お話しくださいと伝えている。

委員)外に出ることが大変な方も多い。コロナ禍で外出を控え身体機能が落ち、認知症が悪化する方も多い。以前のようにみんなで集まって、何かを言うことも怖い。家族も本人もためらっている。オンラインで話ができれば顔も見れて、話もできて刺激になって良いが、80代、90代にはオンラインの操作は難しい。

コロナワクチン予防接種の予約もオンラインでは難しく、川根支所に来て予約をとっていた。

周囲のサポートで認知症の進行が抑えられればと思う。

委員) 最近、認知症の相談に来た家族がいた。今まで誰にも相談することができなかったが、家族内で手に負えなくなったと言っていた。介護申請をしてみると介護1がでた。

包括支援センターへ相談に来ることの敷居が高いと感じている人もいるので、身近な相談場所でありたいと思う。認知症サポーターも増えているため、地域で困っている家族がいれば声をかけて話し相手になってもらう、包括支援センターの周知をしてもらいたい。地域での土壌造りの支援をしていきたい

委員) デイサービスの途中、車を降りる少しの時間で、行方不明になった方がいた。少しのきっかけで、行方不明になる状態であることが、家族に理解してもらえると違う。

別のケースで妻が突然、病気になった。今まで妻任せの生活であり喪失感に伴い、何もできなくなった夫からの、相談対応をしている。受診はしているが短期記憶が保たれない。妻のことばかり考えてしまい、絶望的な感情を抱いている。

会長) 本日は貴重なご意見をありがとうございました。様々な分野の方から色々な話を聞くとコロナ禍での問題がでてくる。どれも一長一短で解決できる問題ではない。話し合いの場をすすめながら少しずつでも前進していきたい。

5 閉会

事務局) 会長、委員の皆様ありがとうございました。参集型とオンライン参加の混合型となりましたが無事に終わることができました。今後も認知症を支える施策に反映させていきたい。委員の任期は令和4年度までとなりますので、引き続きよろしく申し上げます。

以上で令和3年度第2回認知症対策検討委員会を閉会します。

ありがとうございました。